

## —アメリカンフットボール部—



- 体育会名：関西学院大学体育会アメリカンフットボール部
  - 創部年：1941年(昭和16年)
  - 2025年度会員数：161人(4年48人、3年42人、2年37人、1年34人)
- 
- 同窓倶楽部名：関西学院大学体育会アメリカンフットボール部同窓倶楽部  
\* 関西学院同窓会 公認団体
  - 同窓倶楽部通称：KG FIGHTERS CLUB
  - 設立年：2022年3月30日(令和4年)
  - 会員数：1869人
- 

部としての歴史はたかだか70有余年。しかし、この部は関学に学ぶ多くの学生、教職員、そして同窓生、ご家族から終始、手厚く支持されてきた。この部を知り、この部に加わり、この部で育った者は今、1500人を超えた。その多くはこの部につながってきたことを喜びとし、誇りとする。この部が何か、目に見えぬ大いなる者に、愛され祝福されているのが感じられる。

アメリカンフットボールは大正の末、岡部平太氏が米国留学から持ち帰り、東京高師ラグビー一部で研究されている。その後1934(昭和9)年に、立教大のポール・ラッシュ氏らの呼びかけで立教大、早大、明大の二世選手を中心にチームが誕生。11月末に神宮外苑競技場で学生選抜と横浜外人クラブとの、日本での初試合が行われた。12月には東京学生連盟が正式に発足。3校のリーグ戦は明大が勝った。翌年3月、南カリフォルニア大を中心とした米国選抜軍が来日。紅白戦、全日本との対抗戦等を行った。この年、慶大、法大に、西では関大にそれぞれチームが生まれ、40年には日大、同志社も加わって、東6、西2大学となった。

やがて上ヶ原にもこの楕円球が入ってきた。関学は全国で9番目のチームとして名乗りを挙げた。40年秋の関大と同志社の試合を川井和男、井床国夫、布谷武治、石田喬らが観戦したのがきっかけという。危険なスポーツと渋る学院を説得してスタートに漕ぎつけたが、まさに無からの第一歩だった。ここで川井が活躍、設立が決まるとすぐ上京した。ポール・ラッシュ氏に関学を売り込むとともに、紹介された会長の浅野良三氏から2000円もの寄付を受け、専門メーカー玉沢運動具店で防具、ユニホーム22人分を注文して戻ってきた。こうして41年2月11日に宝塚ホテルで部がスタートした。

軍部の指導で、鍛錬部競技科の「鎧(がい)球倶楽部」と呼ばれた。功労者川井は学生監

督を名乗り、主将を井床が務めた。1月から部員を募集。2月の部創立の後、3月24日に関西鎧球連盟へ加盟。この日から練習を始めた。場所は「仁川の川沿いの500坪(1650平方メートル)ほどの、小石だらけの荒地」と部50年史に記されている。初めは関大の指導を受け、攻撃体型はシングルウイングだった。

初試合は5月25日、学院に同志社を迎えて行われた。なんでもありの荒っぽい試合だったそうで0-20で敗れた。秋にはリーグ戦でこの同志社に20-13で勝ち、初白星の感涙にむせんだという。しかし太平洋戦争が始まり。41年の暮れに川井、井床らは繰り上げ卒業で上ヶ原を後にした。川井は部の行く末を案じながら、ついに帰らぬ人となった。また大学スポーツに対する外部の目は厳しさを増した。連盟も海軍闘球への切り替えなど、競技存続を工夫したものの、やがて中止のやむなきに至った。

戦後、各大学は一斉にチーム再建に取り組んだ。関学は45年暮、中谷一明が戻って動きが活発化した。焼け残った防具を集めての再出発だった。関西では46年2月に関西米式蹴球連盟を結成し、関関同のOBによるリーグ戦などが行われた。秋のリーグ戦は、関学と同志社の優勝争いとなった。

2度の引き分けの後、関学は2-7で同志社に敗れた。同志社はこの年に始まった甲子園ボウルに出場した。試合は慶大が大勝した。一方関学では、高商勢の独立運動が起きた。当時の学制は本科、予科で構成される大学と、今日でいう短大、専門学校クラスの教育機関が併設され、両者を合わせて「関学」だった。だが高商組はチームのあり方に異を唱えて離れていった。部は崩壊寸前だった。主将が松島保から松本庄逸に変わり、部員集めから再スタートした。

夏合宿を経て松本主将中心にチームの結束が強まった。このころの発言とされる松本の「わしら皆(アメリカンの)兄弟やないか」との言葉が、チームの基本的な考え方となった。弱体化した小さなチームの中から、上下にこだわらない家族的な姿が現れてきた。この言葉は100人、200人の大所帯となった今でも、モットーとして残る。現在の我が国のスポーツクラブの中でも、新鮮で、示唆に富む。中尉で復員した松本にとっては、スポーツは生きている証しだ

ったに違いない。仲間と一緒にスポーツができる。その喜びを「兄弟やないか」の一言に表したのである。

危機を乗り越えたチームは、順調に力をつけた。やがて大黒柱となる米田満や橘高紀雄が入部した。ここで関学は他校に先駆けて補強に乗り出す。当時は米国の指導によって旧制中学でタッチフットボールが行われていた。松本らチーム首脳は人材獲得こそ強化への道と、奈良中、豊中中、池田中らのタッチの選手を勧誘した。これが当たった。直接大学に進んだ人もいれば、いったん高等部に籍を置いた人もいた。ともかく大きな戦力だったことは間違いない。ここで「人材収集」に奔走したマネジャー橘高の功績は、高く評価せねばならない。

関西リーグは47年から京大が加わって4校となった。関大がリードしていたが、強化に成功した関学は48年、全勝優勝で第4回甲子園ボウルに臨むこととなった。この決戦を前に、毎日のように部室の前でグリークラブの指導を受けながら、選手たちが何やら英語の歌を練習していた。中学部の米国人宣教師ポーター先生の、兄上の作曲、ご夫人の作詞になる、できたばかりの部歌だった。試合は東の代表慶大に25-7と快勝した。ラインの古川明はのちに関西協会の役員として運営に尽力、殿堂入りを果たした。

この試合の第3Q、豊中高出身の徳永義雄が、慶大の右フラットのパスをインターセプト、そのままサイドラインに沿って95ヤードを独走し、TDを奪った。スタンドでこのプレーに大歓声を上げる数人の中学生がいた。47年に新制中学部ができ、放課後中央芝生を通りながら、練習する大学チームの選手たちと、交わり、親しみを深めていった連中だった。この大学と中学のつながりに着目したのが、米田満だった。中学生らは翌49年に正式に部を立ち上げ、のちに関学ファミリーと呼ばれる中、高、大と続く仕組みの基礎をつくった。

初出場、初優勝を遂げた関学は、この後、48年から81年まで、甲子園ボウルには33年間出ずっぱりだった。2023年には57度目の出場を果たした。東との成績は30勝23敗4分けとなった。栄冠は実に34度を数える。中でも73年から77年までの5連覇、2018年から23年の6連覇などの偉業は特筆に値する。

中学から大学まで続く選手補充の仕組みばかりではない。関学の環境整備は行き届き、関

西では敵なしだったのは当然といえた。しかし、あらゆる努力を重ねながら、王座の前に毎年のように立ち上がる存在があった。日大である。実はこれがチーム強化の目標でもあった。

50年春、東西交流戦で早大のTフォーメーションに完敗したのが刺激となって、盛んに新しい戦術、戦法の研究がされた。53年からの4年間は攻撃ばかりではなく、守りでもサインを出して組織的に動くことも試みた。本場米国に学ばねばと、積極的に交流しようとする空気が芽生えた。古川さんがデューク大で学び、武田建さんが戦術書をひも解き、留学先のミシガン大で実際に大きな収穫を得て帰国した。来日する米国の監督、コーチからも積極的に学び取ろうとする姿勢は、関学に色濃かった。また若い人材、QBだった広瀬や、のちに監督を務める伊角や鳥内らが相次いで海を渡った。じかに技術を吸収するためだった。

選手、指導者らを内面からサポートする人たちにも、間違いなく恵まれた。戦後から74年まで部長を務めた大月先生。その後を継いで領家先生、宮田先生、平松先生、芝野先生と続く教育者、高等部の先生で常に「謙虚であれ」と天狗になりがちな若者を見守った西尾先生、中学部の森下先生も忘れられない。

神戸新聞に入社後、学院へ戻り教師となった米田は、61年に部創立20周年を記念して「Fight On」という機関誌をつくった。当初は150ページにも及ぶ本格的なものだったが、8号からはパンフレットとなった。現在も機関誌として受け継がれ、90号を数えている。米田は67年に監督の座を後進に譲った。技術面、作戦面をヘッドコーチとして武田が受け持ち、徳永、芳村らが監督という形でこれをサポートした。

このころから日大とは、何とか互角に戦えるようになった。篠竹幹夫監督が率いる、赤の軍団との競り合いは、甲子園を大いに沸かせた。しかし70年代半ば、京大が関西の舞台中央に登場してきた。米国のコロラド鉱山大に学んだ水野弥一は正面から「打倒関学」を公言し、選手に基本技術を徹底的にたたきこんで、勝負に臨んだ。76年にはリーグ戦で関学から念願の白星を挙げて、関学のリーグ戦での連勝記録を食い止めた。しかし関学は、甲子園の出場権をかけたプレーオフに勝ち、連続出場を守った。

77年には春の交流戦で京大に大敗し、秋には連続出場もここまでかといわれもした。しかし

関学は雨が小止みなく降る11月13日の日生球場で死闘を展開。京大の甲子園行をはばんだ。のちに「涙の日生」といわれる名勝負である。だが、この5年後、関学はついに京大の軍門に下り、連続出場記録にも終止符が打たれた。

90年代半ば、この2校の間に、立命館が割って入った。京阪神の高校から運動神経に優れた優秀な人材を迎え入れると同時に、基本技はもとより、基礎体力の向上を図ったチームづくりに徹して効果を挙げた。94年に甲子園出場を果たしてから、すっかり常連として足場を固めている。

京大と立命館の台頭、つまり関学の33年連続出場時代に関学を追ったこの2校は、関学からチームづくりを学び、試合に臨む姿勢を学び、攻守の作戦を学んだ末に、この地位を獲得した。なによりも関学を倒さなければ、栄光の場にたどり着けないことを知った。力では関学に劣らない。むしろ関学をしのぐ。それでも勝てない年がある。これが関西の水準向上に直結した。もはや関学としても、うかうかできなくなった。基礎体力作り、基本技術の習得、戦術戦法の分析で、この古いチームはコーチ、選手一体となって精進を重ねる。

面白い数字がある。ほとんどの学生スポーツで東は西を上回っているのだが、82年以降の甲子園ボウルの成績は、関西の各校の力が東を上回っていることを、明瞭に物語る。

まず京大は8度出て6勝を挙げ、立命館は9度で8勝、関大は1度で1勝をマークした。関学はこの間24度出場して、17勝5敗2分けと19度の栄冠を獲得した。西はこの43年間で33勝8敗2分け、勝率7割を超えて、東を圧倒している。

なお67回を数える甲子園ボウルの歴史から見て、関学の出場回数はその7割にも及ぶ。対戦相手別の戦績を記しておく。ライバル日大とは30度戦い11勝17敗2分けと大きく負け越す。法政大とは9戦して5勝3敗1分け。立教とは6試合で2勝3敗1分け。明大とは4戦して4勝。早大とも4戦4勝。慶大とは2戦2勝。あと専大、日体大から各1勝を挙げている。

なお、チームの強弱は、今後とも選手、コーチ個々の覚悟と同時に、そのバックとなる大学側の態勢。OB会の姿勢、さらに家族の支持等が考えられる。その中でも、OB会の姿勢は極めて重要である。とりわけコーチングスタッフの、海外での勉強の場をどう作って行くかなど、大

学当局との密接な連絡が必要だろう。

問題になるのは運営資金だが、その備えも他校に比べると万全といえそう。例えばOB会だが、2万円の会費を取っているものの、その納入率は2012年に実に85%を超えた。金額にすると2000万円だが、この高率、全国的に見て極めて珍しい。

さて関大はこれからだが、京大は70年代半ばから強豪としての風格を現し始めた。立命館も90年代半ばから一流の強さが漂う。関学は戦後間もなくから、今日に至るまで王者であり、王者であろうと努力を重ねてきた。そう王者になって、早や77年が過ぎる。こんなに長い間、王者であり続けようとしてきた学生チームは、決して多くない。

□アメリカンフットボール部 部史 編集担当者

丹生恭治(1957年 経済学部)